

仙台市の学校評価システム：「協働型学校評価」について



国立大学法人宮城教育大学
学長付 特任教授
野澤 令照

仙台市のコミュニティ・スクールへの取組

【仙台市におけるC. S. 導入の視点】

1 既存の組織を一体化する

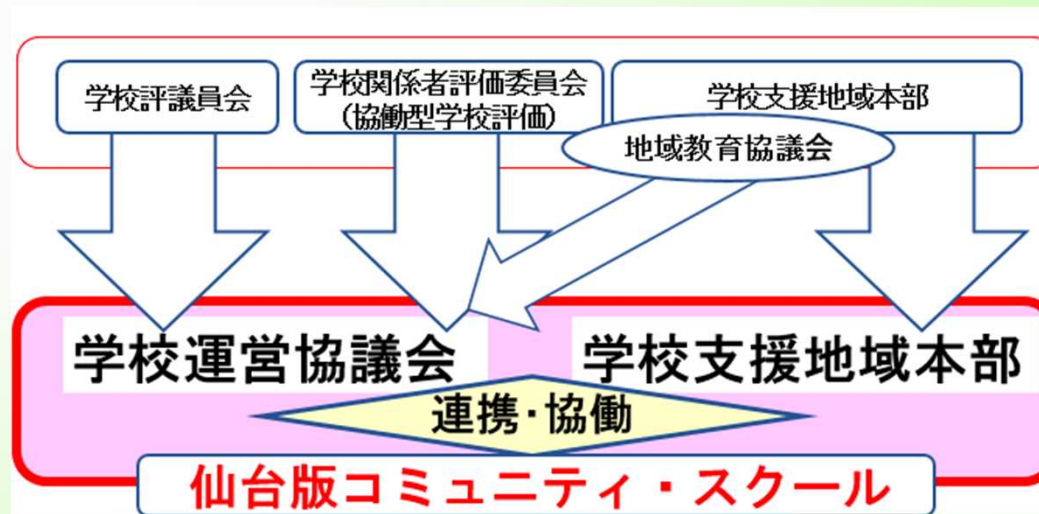
- 学校評議員会・学校関係者評価委員会
 - ・協働型学校評価等の機能を学校運営協議会へ統合

2 ビジョンの共有と分担

- 「育む子ども像」を学校・家庭・地域が共有
- 社会総がかりの教育体制の構築
 - ・三者の役割理解と分担による一体的取組

3 これまでの取組を生かす

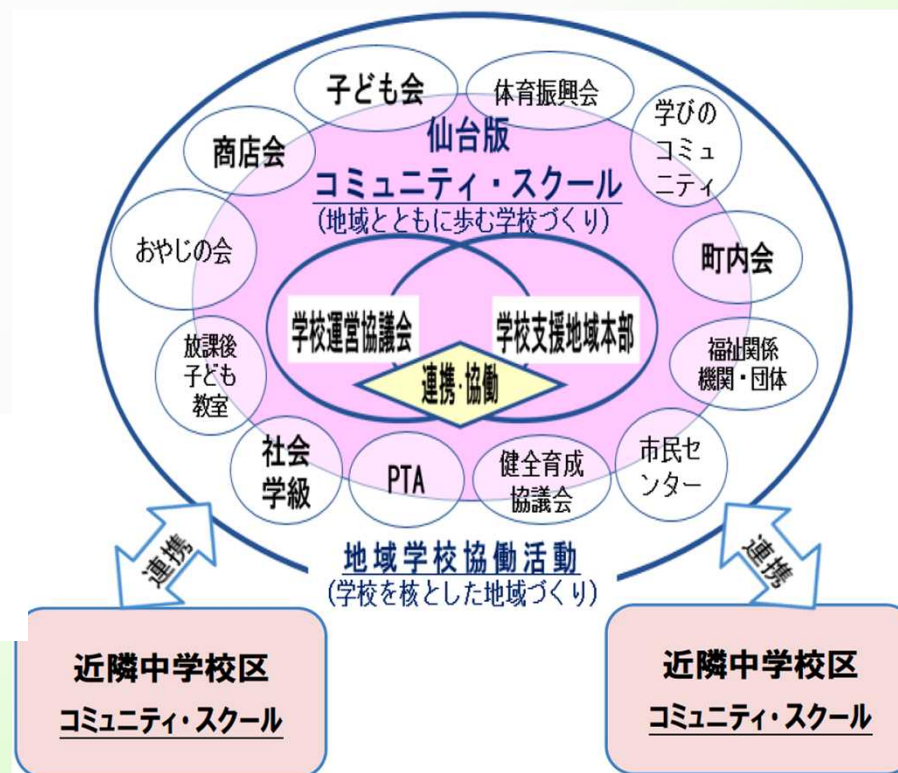
- 学校支援地域本部事業をC. S. と一体化
- 仙台市学校教育の基盤「地域とともに歩む学校」づくりの推進・充実



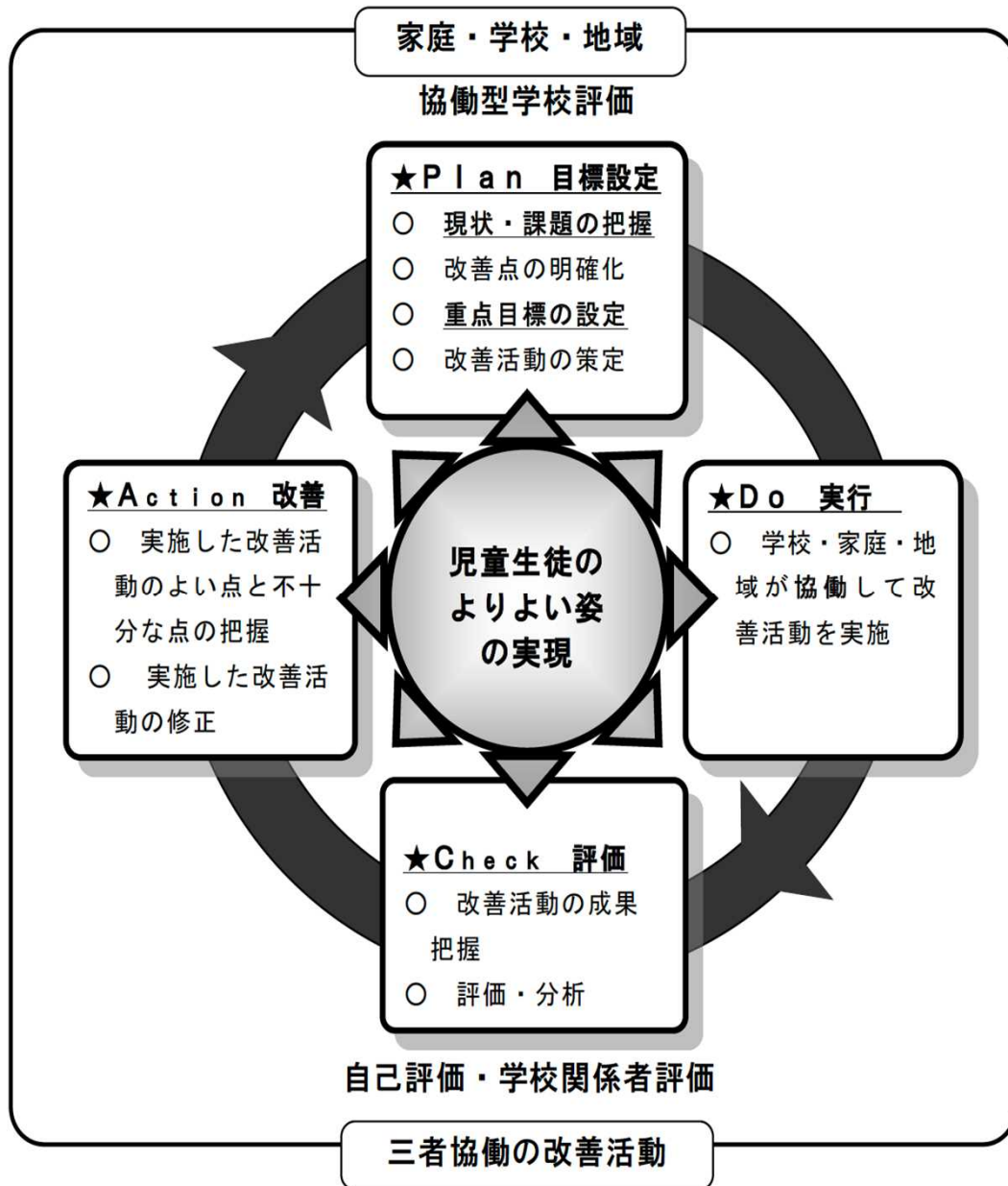
仙台市のコミュニティ・スクールへの取組

【仙台市のC. S. 導入経緯】

- 1 令和元年度にC. S. 検討委員会設置
- 2 令和2年度に17校にC. S. を設置
 - 小学校13校・中学校4校 (中学校は、全て中学校区として設置)
- 3 令和5年度までに全ての市立学校をC. S. とする
 - 小学校118校・中学校64校・高等学校4校・中等教育学校1校・特別支援学校1校・幼稚園1園



仙台市の協働型学校評価について



仙台市で実施している学校評価である「協働型学校評価」は、その基本に、児童生徒の将来や成長について、学校・家庭・地域が共に願いや期待を込めて行動し、児童生徒を支えていくという考え方がある。

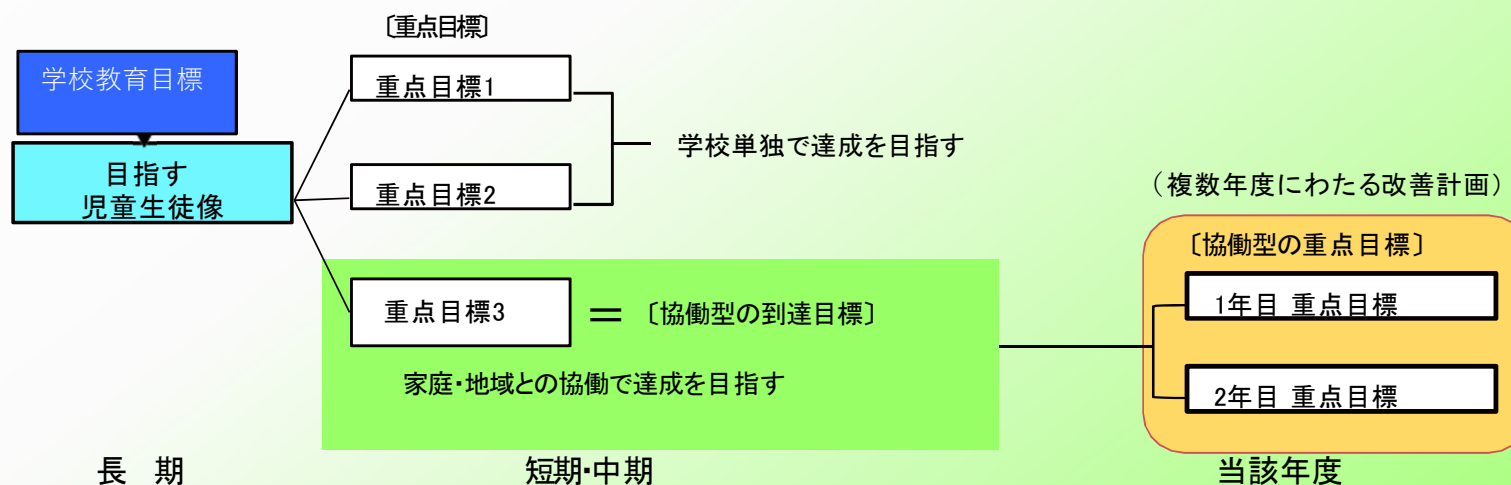
- ★ 目指すべき望ましい姿の実現に向け重点目標を設定
- ★ 学校・家庭・地域が協働して改善活動を実践
- ★ 活動の成果を把握・評価
- ★ 評価を踏まえた活動の修正

協働型学校評価の特徴について

学校評価の本質は「児童生徒のより良い姿」を実現する教育活動の改善にある。

仙台市では平成 22 年度よりこの協働型学校評価に移行した。協働型学校評価は、児童生徒の現状や課題から、学校・家庭・地域の三者が協働して当該年度の重点目標を設定し、それぞれの立場から改善活動に取組み、その成果を次年度に生かしながら、新たな重点目標設定につなぐ、P-D-C-Aサイクルによる改善活動を継続的に行っていくところに特徴がある。

学校の教育活動は多岐にわたるが、協働型学校評価システムに乗せて評価の対象とするのは、当該年度の重点目標に限定し、学校は一点突破型の実践ならびに評価を目指す。ただし、一つのことを徹底して行うことは、当然、結果として他の取組にも波及することが期待される。



学校教育目標と協働型学校評価における 「到達目標」と「重点目標」の関連について

協働型学校評価では当該年度の重点目標設定の在り方が最も重要。だが学校では他にも目標として掲げているものがあり、それぞれの目標と協働型学校評価との関係を整理しておくことが必要。

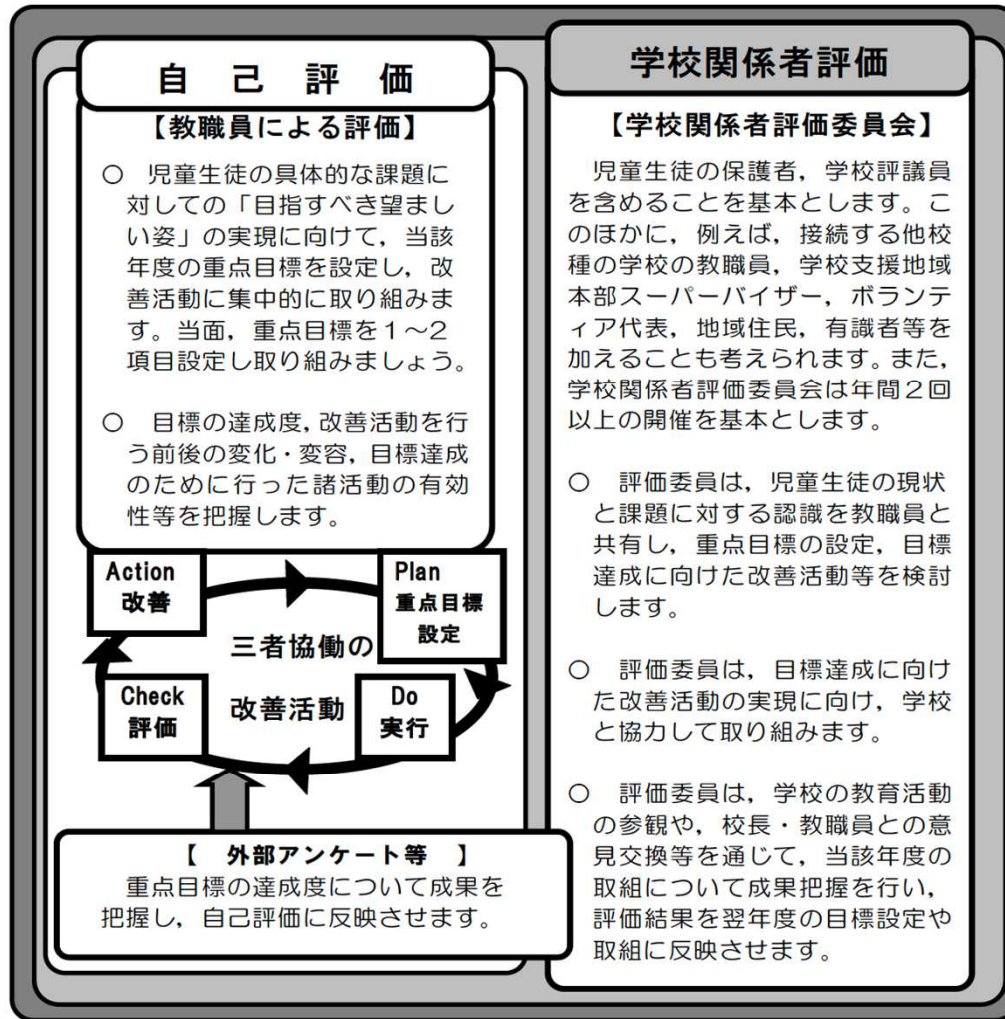
① 「学校教育目標」と「重点目標」

各学校の「学校教育目標」は、「知・徳・体」全てにわたる学校教育全体の理念的な基盤を掲げたもので、その理想像として、「目指す児童生徒像」を掲げている学校も多い。それらの理念や理想像の下、各学校では重点目標を設定している。重点目標は、児童生徒の姿、実態や課題、地域的な特性等を分析し、その結果を踏まえて、短期・中期的な視点から設定されるもので、具体的な教育活動の改善や実践を目指す項目や内容を示すものである。

② 「重点目標」と「協働型学校評価における到達目標」

重点目標は、固定化されることなく、重要性や必要性、緊急性等が高い課題の中から、単年度または複数年度ごとに見直され、設定される。多くの学校では、「知・徳・体」等の観点から複数の重点目標が設定されている。それらの中には、教育機関である学校が単独で取り組むべき課題もあるが、一方で学校が家庭や地域とともに取り組んでこそ教育効果が期待できる課題もある。この三者で課題解決を目指す重点目標が「協働型学校評価における到達目標」となる。

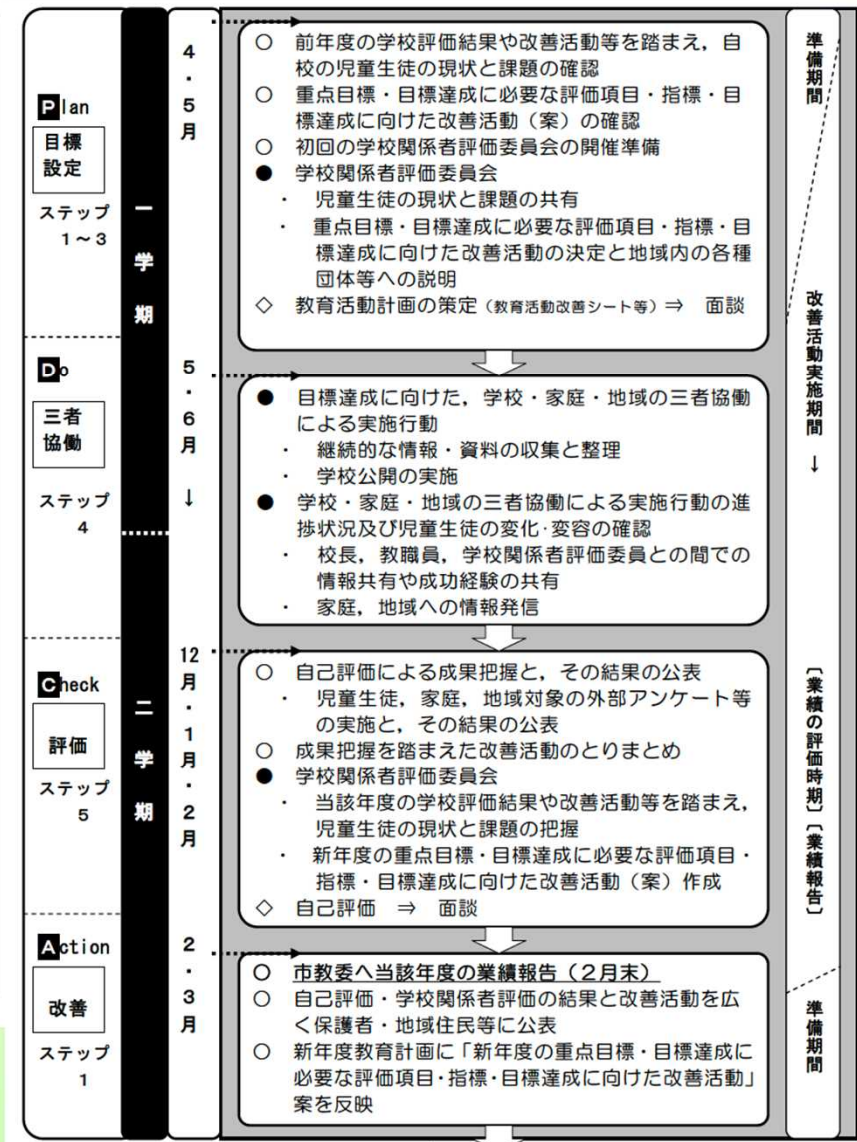
各校における協働型学校評価の実施形態



市教委による各校への支援等

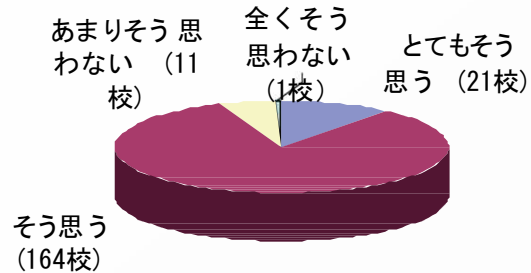
- 教育課程ヒアリング・教育課程訪問・実地検証等を通して、協働型学校評価の普及と充実に努める。
- 市教委が委嘱した学識経験者や校長経験者、PTAや青少年団体など学校と地域の連携について知見を有する方々が学校を訪問したうえで、協働型学校評価の運用の実情を把握し、必要に応じて助言を行う。

協働型学校評価のスケジュール



各校の現状

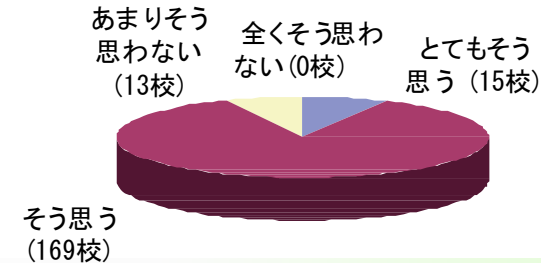
Q1:児童生徒の姿を評価し、適宜改善活動への修正を加えるなど、PDCAサイクルが機能していると思うか。



【学校の声】

- ・目標が具体的で、成果が児童の行動に現れるため、児童の様子を見ながら声がけしたり、家庭や地域と連携したり、改善活動が図られている。
- ・協働型学校評価が地域に周知されていくに従って、学校が地域の教育力を積極的に活用しようという意識が高まってきている。

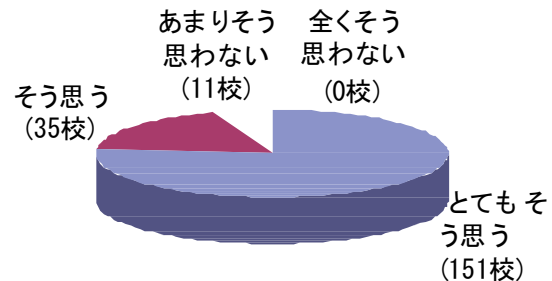
Q2:協働型学校評価は、教職員の協力やチームワークの強化、モチベーションの向上につながっていると思うか。



【学校の声】

- ・地域住民等からリアルタイムで評価が寄せられ、生徒や教職員のチームワークの強化やモチベーションの向上につながっている。
- ・目指すゴールは1つだが、ゴールに向かう各学年の取組を子どもの実態に合わせ、担任の創意工夫を生かして構想するという方法が教職員のモチベーションアップにつながっている。

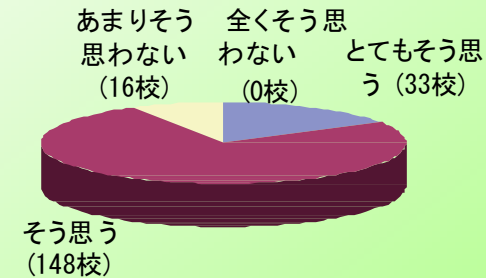
Q3:重点目標への取組が、他の教育活動の改善にもつながっていると思うか。



【学校の声】

- ・気持ちのよい挨拶や話し方ができる子どもを育てることが、各教科における言語活動にもつながっている。
- ・重点目標への取組が縦割り活動や小中連携の活動など、他の教育活動に広がってきている。
- ・保護者から、家庭での音読の取組を通して、親子の会話が増えたという声が多数寄せられた。

Q4:協働型学校評価の取組を通して、保護者や地域との連携が深まってきていると思うか。



【学校の声】

- ・校舎愛護デーと称し、校庭や隣接する学習林の除草作業を呼びかけたところ、早朝もかかわらず、総勢約300人も集まり協力いただいた。
- ・学校支援地域本部事業を有効活用することで、地域の大人が学校教育に携わる機会が大幅に増加した。
- ・地域の方々が来校し、地域や子どもの教育活動に関して情報交換をする機会が日常的に生まれるようになった。